

5 子宮腫瘍におけるc-onc遺伝子の研究

大宮中央総合病院, 日本獣医畜産大・分子腫瘍*
太田雄治郎, 吉田雄一郎, 野村信夫*

〔目的〕子宮頸癌とH P Vとの関連が報告されているが、発癌の多段階説に従えば、さらに他の癌遺伝子の関与が充分考えられる。しかし子宮癌における癌遺伝子に関する報告は少い。一方正常組織においては、細胞性癌遺伝子が細胞の増殖分化に強く関与していることが明らかになってきている。そこで今回我々は、良性腫瘍である子宮筋腫も含めた子宮腫瘍における癌遺伝子の関与について検討したので報告する。

〔方法〕手術により得られた新鮮な子宮組織（子宮頸癌10例、子宮内膜癌5例、子宮筋腫5例、および対照として正常な子宮組織5例）から定められた方法に従ってDNAを精製し、既知の oncogene である myc, N-myc, fos, K-ras など18種とH P V16および18の2種のprobeを用いSouthern blot hybridizationを行い検討した。

〔成績〕子宮癌、子宮筋腫の全例がこれらc-oncと正常コピーのレベルでhybridizeした。増幅に関しては子宮頸癌の1例にfosの増幅が認められた。c-oncの再編成は認められなかった。

〔結論〕子宮頸癌の1例にfosの増幅を認めた。fosは正常末期胎盤などにおいてそのmRNAが高倍率で転写されており正常細胞における増殖分化に関与していることが知られている。本症例ではfosが癌細胞において何らかの関与をしていることが明らかとなった。しかしこの遺伝子の増幅が発癌の原因であるのか結果であるのかは本研究からは判明できない。また子宮筋腫においては、著変を認めなかった。

6 子宮内膜の癌化に伴う糖鎖抗原の変化

大阪大学 医学部
井上正樹, 清水千賀子, 清水 廣, 斎藤淳子,
上田外幸, 谷澤 修

〔目的〕細胞膜に存在する糖鎖抗原は細胞の増殖、分化、細胞相互間の認識に重要な役割を持つことが知られ、癌化に伴って起こる糖鎖抗原の変化に興味を持たれている。そこで、我々は代表的な糖鎖抗原である血液型物質及びその関連糖鎖の子宮内膜における癌化に伴う変化について検討した。〔方法〕血液型物質（A, B, H, Le a, Le b）及び関連物質（Le X, Le Y）に対するモノクローナル抗体を用いて、胎児正常子宮内膜22例、成人正常子宮内膜56例、子宮内膜癌73例のホルマリン固定、パラフィン包埋切片について、免疫組織学的に抗原の局在を検討した。〔成績〕胎児子宮内膜においてはA, B, H適合抗原、Le b, Le Y抗原はほぼ全例に強く発現したが、Le a, Le X抗原は殆どの症例で陰性であった。一方、成人正常子宮内膜ではA, B, H適合抗原、Le a, Le b抗原は大多数の症例が陰性であったが、Le X, Le Y抗原は約半数の症例で陽性で、強く発現する症例も認めた。子宮内膜癌ではA, B適合抗原の発現は正常と大差ないが、Le Xは正常に比し発現の減弱を認めた。しかしH抗原、Le a, Le b, Le Y抗原の発現の著明な増強を認めた。〔結論〕H, Le b, Le Y抗原は正常では比較的弱く、胎児子宮内膜及び内膜癌で強く発現することより oncofetal antigen の性格を有すると考えられ、逆にLe Xは胎児子宮にはなく成人正常子宮内膜に発現し、癌で減弱することより成熟分化に関連する可能性が示唆された。Le aは癌のみに比較的強く発現することから癌関連抗原の可能性が示唆された。また、癌組織においてH, Le b, Le Y抗原の増加が著明なことより、癌における fucose 転移の亢進が示唆された。